



特集



新美南吉

生誕100年

今年の七月三十日、児童文学者・新美南吉の生誕100年を迎えます。この機に、その生涯と作品世界について特集いたします。三人の作家が語る作品の魅力、児童文学研究者による解説などを通し、彼の人となりや思想を、かい間見ることができればと思います。

作家が語る 南吉作品の魅力

どれほど優しく見えたとしても

作家 石井睦美

初めて触れた南吉の作品は『おじいさんのランプ』だった。

孤児の巳之助^{みけのすけ}少年が、町で「花のようにあかるいガラスのランプ」を目にする。巳之助の住む村ではまだランプを灯す家などなかったため、彼には初め、それがなんなのかわからない。それでも、暗い夜をあかるませるうつくしいものは、巳之助のこころを捉え、動かし、ついに彼はランプ屋として身をたてるに至った。時は流れ、町には電気がひかれた。早晩、それは村にもやってくることになる。受け入れがたい思いが巳之助^{みけのすけ}を苛む。けれど、時の流れを止めることができることを一番に知っているのは、ほかならぬ巳之助自身だ。なぜなら、電気はあの日の巳之助のランプそのもののなから。

新しかったものはやがて古いものとなり、新しくきたものに、その位置を奪われる。滅びるもの、失われていくことへの、痛みや悲しみが、優しい語り口に滲^{にじ}んでい

る。すべてのランプを灯して、木にぶら下げ、それに石を投げつけては壊していく。ひとつまたひとつとランプは壊れ、消えていく。三つ目のランプが消えてなくなったとき、巳之助はもうランプを壊すことができなかつた。巳之助の悔しさが伝わる。寂しさが染みる。

そんな巳之助にこころを寄せ、時代の流れを残酷なものに感じたのは、小学生のときのことだった。以来ずっと、それはわたしのなかにあり続けた。

おとなになって読み返したとき、巳之助がランプを壊したもうひとつの、いや、ほんとうの意味がわかったような気がした。巳之助にとつて、ランプはただの商売道具ではなかつた。それは、巳之助を経済的に助け、字を覚えさせ書物を読むことを教えた。つまり、孤児の少年巳之助の親代わりともいえるものだった。それはかけがえないものであり、失われてはならないものだ。



しい むつみ

一九五七年、神奈川県生まれ。出版社勤務を経て、執筆活動に入る。「五月のはじめ、日曜日の朝」で新美南吉児童文学賞などを受賞。著書に「すみれちゃん」シリーズ（偕成社など）、光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

巳之助が、幼少のころ母親を亡くした南吉に重なる。死によって母親を奪われた南吉は、その不条理を受け入れてはいなかったのだ。いちばん大事なものを他者によって奪われ失われるなら自分の手で、南吉はそう願わなかつたらうか。巳之助はそう願わなかつたらうか。ひよつとして『ごんぎつね』でごんを殺さなくてはならなかつたのも同じ理由かもしれない。

南吉の文体は優しく静かだ。でも、そのなかには狂気が潜んでいる。その狂気こそが、物語に命を与えているのだと思う。



悲しみの湧き水で洗われる世界

作家 志茂田景樹

別の町から越してきて中学に入った僕には友達がいなかった。そのことと、体が小さく虚弱だったこともあっていじめを受け、学校へ行くのが辛くなった。

ある日の昼休みに、いじめっ子達から避難したい気持ちから学校の図書室に入った。棚の本の背表紙を見て回ってすぐに、僕は「新美南吉」という著者名に関心をそそられた。

(新しく美しい)

とは何という言葉だろう。いじめから逃れたいという思いが新しく美しい世界にいる自分をイメージさせたのかもしれない。

そうして抜き取った童話集で『「こん狐」』をはじめとしていくつもの新美南吉作品と出会った。

どの作品も僕には悲しく切なく、とりわけ『「こん狐」』の結末には涙を誘われた。

(何で撃っちゃうんだよう！)

心で叫んだが、それは決して兵十を咎め

たものではなかった。

悲しく切なくてもそのときの全作品が僕の心に美しく染みた。それはどうしてだったろう。

高校に進学してまもなく新美南吉の作品を読み返したことがある。それまでに読んだ作品に限ったことで、作品の数にしても三十点に届かなかったと思う。

新美作品には『仔牛』『里の春、山の春』などのように、ほのぼのとして心が温かくなるような作品も多いのに、いやむしろ、そういう作品のほうが主流なのに、やはり、読後は悲しく切ないものが胸に染みしてくる。それが新美南吉の作品の魅力であり、かつ秘密に僕には思えた。

高校から歩いて十五、六分のところに谷保天満宮があり、その頃、そこへ散策に行った。拝殿の横手のほうに湧き水の小池があつて山葵が栽培されていた。水が湧いているところは水面がぼこぼこ盛り上がりつ

ていた。

そのさまを見ているうちに、新美南吉は湧き水のようにあふれる悲しみで物語を紡いでいたのではないか、とはつと思つた。その悲しみは新美南吉のとても深淵で純粋な人間性から湧き出ているもので、悲しく辛い気持ちで読んだ読者のその悲しみ辛ささえもきれいに洗い清める力を持っている。ずっと後年になって僕は読み聞かせ活動を始めたが、自作の童話を読み聞かせるときも新美南吉の悲しみの力を借りている。



しもだ かげき

一九四〇年、静岡県生まれ。中央大学法学部卒業。一九七六年「やつと探偵」で小説現代新人賞を受賞し、執筆活動を開始。一九八〇年、「黄色い牙」で直木賞受賞、「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国各地で読み聞かせの活動を行っている。



人として忘れたくないもの

——南吉の物語世界

作家 那須田 淳

ときとして思いがけないことがおきる。でも、そんなときこそ、僕は立ち止まり、もう一度自分のあしもとを見つめなおすよい機会なのかもしれない。

東日本大震災もそうだった。

僕は今、東京とドイツのベルリンに、年に半分ずつ暮らしているのだけれど、当時はベルリンにいて、入ってくるニュースに胸を痛めた。そして、すぐにドイツの友人たちと一緒に、被災地に向けて支援物資を送るとしたらなにがよいかと話し合ったものだ。その一つにランプはどうだろうか、電気も通らないところで使えるから役に立つのではないという意見があった。結局、被災地の受け入れが難しいとのことで送らなかったのだけれど、そのとき、僕は新美南吉の『おじいさんのランプ』を思い出さずにはいらなかったのである。

ランプ売りのおじいさんが、新しい電灯時代の到来で商売がうまくいかなかったことを嘆き、村に電灯を引き込むことを決

めた区長さんを恨んで家に火をつけに行く。そこで、火打石を使うとするが、なかなか火がつかず、こんな古くせえものは、いざとなると間に合わないのだと悪態をつく。だがそのとき察するのだ、世の中が進んで、自分のランプこそ、その「古くせえ」ものになっていくことに。

今になって、ランプのほうがかえって便利なこともあると思うのは皮肉に感じるが、この物語の核心は、文明の発達や新しい時代への讃美ではもちろんない。

人というものは弱いものだ。うまくいかなかったときに人のせいにし、恨んだり妬んだりする。でも、そこで自分に負けてはだめだと南吉は、おじいさんの口を通して、孫に語りかけるのである。

後悔し、改める。これは、『花のき村と盗人たち』など他の南吉の物語にも通じる世界観である。

南吉の扱う物語の登場人物たちは、みなどこか問題があったり、頼りなかったりす

る。そんな彼らはその弱みゆえに流されそうになるが、でも最後に踏みとどまり、前を向いて生きようとするのだ。

南吉の物語を読んで流す涙があたたかいのは、ああ、僕もこういうところがあるなあと思いつつ、主人公たちの改心といった生き方に救われ、どこかで癒されるからだろう。過ちに気がついたら直す。それは人として忘れてはいけないうちに違いない。

災害やいじめ、不況にと揺れる今という時代だからこそ、もう一度、自分を見つめるためにも、ゆっくり南吉の物語と向き合ってみたいと思うこのごろである。



なすだ じゅん

一九五九年、静岡県生まれ。早稲田大学卒業。一九九五年からドイツのベルリン市に在住。著書に、『坪田譲治文学賞受賞作「ベーター」という名のオオカミ』『小峰書店など、共訳書に「新訳 飛ぶ教室」(角川つばさ文庫)などがある。



新美南吉 生誕100年



1 南吉の生涯

新美南吉は、愛知県知多半島の東海岸にある半田町（現・半田市）で、大正二（一九一三）年七月三十日に、父・渡辺多蔵、母・りゑの次男として生まれた。本名は正八。父が好きだった講師の柳川庄八に由来し、生後すぐに亡くなった兄の名を継いだ。四歳で母・りゑを失い、二年後に継母・志んが来て異母弟の益吉が生まれている。八歳の時、叔父（母の弟）が死去したため母方の新美家の養子となり、戸籍上



半田中学校時代の南吉

は新美正八となった。養家で血のつながらない祖母と二人きりで過ごした寂しい幼年期の体験は、最晩年の「小さい太郎の悲しみ」のモデルになっている。

昭和六年、県立半田中学校を卒業後、岡崎師範学校を受験したが体格検査で不合格となり、母校の半田第二尋常小学校の代用教員を勤める。十七歳の南吉は、この時「ごん狐」を作り、子どもたちに実際に語って聞かせた。この年の一月に復刊した『赤い鳥』に、童話（鈴木三重吉選）と童謡（北原白秋選）を熱心に投稿し、「ごん狐」は翌年の『赤い鳥』一月号に掲載されたのである。中学二年頃から創作を始めた南吉は、日記に「悲哀、即ち愛を含めるストーリーリイをかこう」と記しているが、初期の代表作「ごん狐」には、この考えが反映している。「孤独な魂が愛を求めて奏でる哀切な響きの美しさ」とへいじらしく、優しく、ひたむきな「ごん狐のキャラクター」とが、作品



『赤い鳥』（昭和7年1月号）と、掲載された「ごん狐」

の魅力である。

昭和七年四月、東京外国語学校（現・東京外国語大学）英語部文科に入学。幼年童話を書き始め、北原白秋の勉強会に出席し、傾倒していたマンスフィールドの小説やミルンの童謡の翻訳、評論「バイロンについて」の執筆などを行っている。南吉がこの時期に出会った都会的・西洋的な文化は、後の創作活動の豊かな養分となった。結核の再発によって四年半の東京生活を終え、南吉は昭和十一年十一月に帰郷する。以後は半田で、美しい自然と素朴な人々に詩を見出しながら創作を続け、昭和十八年三月二十二日に、喉頭結核のため二十九歳七ヶ月の短い生涯を閉じた。

南吉の幼年童話は五十編ある。その内の約三十編は東京外国語学校四年生の昭和十年五月に書かれた。南吉が「いい兄さん」と慕っていた異聖歌（※）から、幼年童話集出版の話があったからだが、実現はしなかった。いずれも原稿用紙三枚ほどの短い話なのに、南吉が評論「童話に於ける物語性の喪失」（昭和十六年）で主張した物語性——「文体の簡潔、明快、生新さ、内容の面白さ」をもっている。人間と動物とのほのぼのとした交流を描く「こぞうさんのおきょう」「里の春、山の春」、アンデルセ

2 子どもを抱く哀しみ

ンを連想させる幻想的な「木の祭」「去年の木」、哲学的な「かげ」、意表をつく（反転する）結末が面白い「飴だま」「赤いろうそく」など、多様な世界が開花している。ナンセンスなおかしさがあり、幼い人の柔らかなくみずみずしい心に届く優しさで語られていて、教材やストーリーテリングに向く作品が多い。

幼年童話「でんでんむしのかなしみ」は、平成十年九月にインドで開催されたIBBY（国際児童図書評議会）世界大会でのビデオによる講演で、皇后美智子様が幼年期に心の支えになった話として言及され、



安城高等女学校教員時代の南吉

注目を浴びた（橋をかける『文藝春秋』）。へ人は誰でも悲しみをもっているのだから、自分で自分の悲しみに耐えないといけない」という南吉のメッセージは、子どもたちが生きることをつらく感じる時の心の支えとなる。南吉は、一貫してこのことを作品で書き続けた。

東京外国語学校卒業後、失恋・発病・失業という人生最悪の時期を経て、昭和十三年に県立安城高等女学校に就職。社会的・経済的にも健康面でも安定を得た南吉は、友人で満州にいた江口榛一から「哈爾濱日日新聞」という発表の場を与えられて、意欲的に創作を始める。昭和十四年から十六年にかけて、「久助君の話」「屁」「川」「嘘」などの子どもを主人公に内面を描く連作を発表。特に、学校ではおどけ者の兵太郎がとつくみあいの後で見せた寂しげな表情に驚き、久助が「一つの新しい悲しみ」を抱く「久助君の話」を重視していた。この作品で、南吉は、子どもの屈折した心（悲しみ・孤独・不安・懐疑・エゴ・劣等感など）に着眼し、新しい表現技法（子どもの内面を子ども自身に独白で語らせる手法）を試みて成功したからだ。（何ということか。いったい、これは誰だろう。なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。）とい

※白秋のまな弟子で「たきび」を作った童謡詩人。南吉童話を世に出すことに尽力した人。

うように。昭和八年に書かれた評論「外から内へ」での主張〈子どもの内側に入って子どもの五感で世界を捉えよう〉を、実作として結実させたのである。

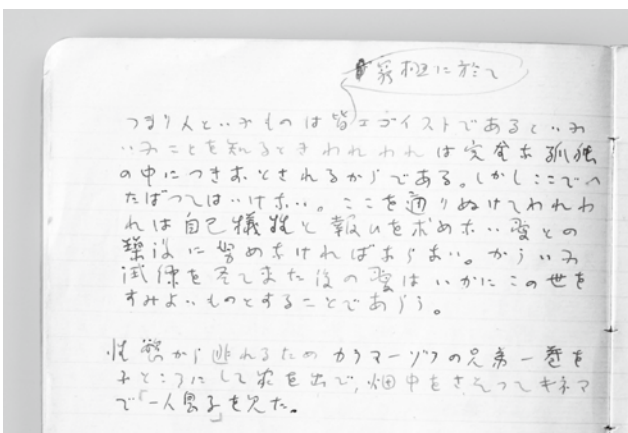
よく知っている人間の全く別の側面を見た五年生の久助君の驚き（悲しみ）について、大阪の小学六年生の子どもはアンケートで、「大人になる道を一步進ました重大な発見だ」「私たちがなやんでいることをといてくれる」と感想を書いていた。「久助君の話」は、子どもから大人への過渡期にある子どものアイデンティティ（自分が自分であること）を覚醒させる。

南吉は、安城高等女学校で、南吉の赴任とともに入学した十三歳の少女たち（十九回生）を卒業までの四年間担任し、熱心に日記指導をした。その中で、思春期の子どもたちが抱く悲しみ・喜び・悩み、物事に対する感じ方や考え方と実際に出会い、作品に反映させていった。

昭和十八年一月に、南吉はのどの痛みに耐えながら、再び子どもを主人公にした「小さい太郎の悲しみ」「疣」「狐」を書いた。この三作品は、それぞれ違った角度で、子どもが人間として成長していく過程で必要な人生上の認識が、完成度の高い洗練された文体によって造形されている。「小さい

が（世のため人のためになる生き方）」を模索する主人公として描かれている。こういうテーマを描くためには、社会と時代に関わって生きてきた大人の主人公を必要としたわけだが、南吉の名を不朽のものとしたこれらの作品は、子どもたちに（人はいかに生きるべきか）を語っている。

なかでも「おじいさんのランプ」は、主題・構成・表現のいずれの点でも児童文学としての完成度が高く、深い美しさがある。



昭和12年3月1日付の日記



安城高等女学校で担任した19回生との写真（中央が南吉）

太郎の悲しみ」は〈泣いても消すことのできない悲しみ〉を、「疣」は笑いを織りこみながら〈悲しみに耐える力〉を描き、心の面で困難な時代を生きる子どもたちへの励ましとなっている。それに対し「狐」は、初期の「ごん狐」「手袋を買いに」と中期の久助君シリーズの融合形で、祭りの晩に新しい下駄をはいたために、友だちから狐が憑いたと疎外されて悲しむ文六を母親が

十三歳の少年で孤児の巳之助は、つねづね身を立てたいと思っていたが、〈自分のための立身〉が〈人のため〉にもなるように描かれている。最初のランプ屋では、「お金ももうかったが」自分の村の暗い家々に「文明開化の明るい火を一つ一つとしてゆく」のが喜びでもあったというように。そして「青やかな光」の「花のように明るいガラスのランプ」は、商品以上に美への憧れと文明の象徴であり「希望のランプ」として存在する。電気が登場すると、「世の中のためになる新しいしよばいにかわるうじゃないか」と、巳之助は本屋になる。電気屋ではなく本屋になったのは、「字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ」という思いからであるが、物質文明以上に精神文明の大切さを主張しているところに、主題の深さがある。

この作品の美しさは、大野の町で初めて見た「出会いのランプの明るさ（希望）」が、電気の登場によって暗く屈折（絶望）した後、半田池での光のフィナーレ「別れのランプの明るさ（煩悶をくぐりぬけた後の希望）」へと発展していくところから生まれてくる。巳之助の人間としての成長の過程が、明と暗の対照法で描かれているのだ。半田池のまわりの木につるしたなつかしい

無償の愛で包む物語である。南吉は創作活動の最後に、母という最も身近な大人の愛に守られた子どもの〈寂しさ・悲しみ〉を描き、安心感のある世界（子どもにとって何が大切な）を提示した。「狐」はまさに〈哀のある愛のストーリー〉である。

3 無償の愛に生きる大人の主人公

南吉は人生最悪の昭和十二年に、思想の根幹となる次のような認識に達した。

「人といふものは皆窮極に於てエゴイストであるといふことを知るときわれわれは完全な孤独の中につきおとされる」が、「ここへたばつてはいけない。ここを通りぬけてわれわれは自己犠牲と報ひを求めない愛との築設に努めなければならない。かういふ試練を経て来た後の愛はいかにこの世をすみよいものとするのであらう」（日記 昭和十二年三月一日付）。

そして、病気が悪化して死を覚悟する昭和十七年四月と五月に、大人を主人公にした「おじいさんのランプ」「牛をつないだ椿の木」「鳥右衛門諸国をめぐる」など六編を集中的に書く。これらの作品は、〈孤独を通りぬけて無償の愛を〉という思想

ランプをバリーンと割った時、巳之助の目には涙がうかび、ランプへの愛は哀に変わる。人物の動きの中に自然描写を織りこみ視覚と聴覚を響きあわせて、詩的な「光の世界」を創り出している。

構成は、全体を現在↓過去↓現在という回帰型にすることで、孫の東一君が祖父の若かった時間を共に生き、がみがみ叱るだけの老人だと思っていた「おじいさんはえらかったんだ」と感動して認識を変え、本屋を営む自分の家の来歴を知るという巧妙なプロット（因果関係）になっている。それは作品を味わい深くしている。

* * *

南吉文学の背後には、静かで青い海に囲まれた柔らかな緑と光の豊かな知多半島が、南吉の精神風土となつて広がっている。その基調には、のびやかな明るさ、清冽さ、透明感があるが、それは郷土の美しい自然から生み出されたものである。

たに えつこ

一九四四年、徳島県生まれ。大阪市内の公立小学校教諭、梅花女子大学教授などを経て、同大学名誉教授。著書に「新美南吉童話の研究」（くろしお出版）「まど・みちお 詩と童話」（創元社）など、編書に「新美南吉詩集」（ハルキ文庫）などがある。

南吉に魅せられて



研ぎ澄まされた美しい文体で多くの物語を紡いできた新美南吉。その作品の世界は、今、さまざまな表現によって姿を現し、広がっています。それらのうち、ほんのいくつかをご紹介します。

人形劇

人形劇俳優 たいら じょう
「ごんぎつね」

人形は、きつねの頭と尾のみ。舞台には黒い平台が一つだけ。たいらじょう氏の創りあげた人形劇「ごんぎつね」は、余計なものを極限までそぎ落とし、観客の想像力が入り込む余地を残した中で繰り広げられます。「ごん」以外の人物については、彼自身が俳優として演じるのだといいます。「舞台の上には彼岸花もないし、川も流れていない。でも、そこに存在しないものを見せることができるのが、演劇のいちばんの魅力です。『彼岸花が赤いきれのように咲き続く』景色をお客さんに見せたいときに、それを絵で描いてしまったらそこまで。私は、受け取り手それぞれに、自分がいちばん美しいと思うその景色を想像してもら

いたい。たぶん、原作者の新美南吉もそう願っているはず。だから、あえて描かずに、私の演技を通して想像してもらうんです」と、彼は語ります。それぞれの想像力にゆだねるからこそ共感が生まれ、それが見る者の心を動かすのでしょうか。

作品「ごんぎつね」との出会い、小学校の教科書でした。読んで衝撃を受け、人形劇俳優として生きる中で、この作品は当然、演じるべきものであると思い続けてきたのだといいます。他の人たちの舞台を見るにつれ、「自分の思う『ごんぎつね』はこう。自分の思う『ごんぎつね』を作らなきゃ」という思いが高まり、創作に至ります。彼は続けます。「私の人形劇は、『見る文学・見る読書』だと思っています。五感を使い、どっぷりと作品に浸り、新美南吉の本を読み終えたときの幸福感・満足感を味わってもらいたい。たいら氏の人形劇を通し、南吉の思想や世界観にいつそう近づきことができるかもしれません。

演劇

劇団 オクムラ宅
「新美南吉の日記
1931-1935」

新美南吉自身の生き方を取り上げた演劇。南吉の残した日記や詩をもとに、彼の十八歳から二十二歳頃までの出来事が物語として描かれます。

脚本は、南吉の日記や詩の引用と、南吉の人物像を解説するような語りとで構成されます。脚本・演出家は奥村拓氏。彼によれば、本作品の劇作家として、「南吉を知

らない人には興味をもってもらう」「知っている人にはもっと興味をもってもらう」という二つの使命をもって作品作りに臨んだとのこと。

「南吉の作品が大好きで、演劇のモチーフに取り上げてみたいとずっと思っていました。あるとき、俳優向けのワークショップ用のテキスト探しをしていて、南吉の日記に出会い、これを題材に演劇を作ろうと思ひに至りました。僕の『新美南吉論』がダイレクトに伝わる脚本になっているはず」と語ります。奥村氏が捉え、魅了された南吉像に触れることができる作品といえるでしょう。

アニメーション

「おちいさんのランプ」

南吉にとって初めての児童書の表題作「おちいさんのランプ」が脚色・アニメー

ション化された作品です。文化庁の若手アニメーター育成プロジェクトとして制作されました。

作中では、「村人たちの生活を明るくしたい」という主人公・巳之助の真つすぐな心根と、変わりゆく時代が、温かく色彩豊かに描かれています。ランプと電気の光の、微妙な描き分けは、見る者の目を奪います。

人形劇俳優 たいら じょう

1981年、北海道生まれ。操演者自らも参加しながら進行する独自のスタイルで、全ての役柄を一人で演じ分けるとともに、脚本・演出・音楽・美術も手がける。子ども向けのオリジナル作品の厚生労働大臣表彰など受賞多数。

公式ウェブサイト：
<http://tairajo.com>



劇団 オクムラ宅

俳優・演出家の奥村拓が主宰する演劇ユニット。2010年4月に旗揚げ。同氏は、1980年、福井県生まれ。2012年10月、『まばたき』でAAF戯曲賞最終候補。

公式ウェブサイト：
<http://okumurataku.com>



©TELECOM ANIME
テレコム・アニメーションフィルム制作/
25分/税込み1,400円
※公式ウェブサイトにて販売。
<http://www.telecom-anime.com>



2013年開催 新美南吉生誕100年記念イベント

- 新美南吉生誕100年没後70年記念
五木寛之講演会
3月24日(日)／^{かりやど}雁宿ホール(半田市福祉文化会館)
人間のエゴと美しい生き方を描く南吉文学を、作家・五木寛之氏が語る。
 - 生誕100年記念特別展
7月13日(土)～10月27日(日)／新美南吉記念館
南吉文学とふるさと知多半島との関わりを紹介。
- 【新美南吉生誕祭】※会場は雁宿ホール。

 - 開幕式典・ことばの杜朗読会
7月27日(土)
元NHKアナウンサーと市内の小学生らによる南吉作品の朗読会。
 - 生誕100年記念シンポジウム
8月3日(土)
南吉童話における、声に出し、耳から味わうことの大切さを考えるシンポジウム。
 - 南吉の愛したクラシック音楽
8月4日(日)
名古屋フィルによる演奏と中京テレビアナウンサーによる南吉作品の朗読。

※この他にもたくさんのイベントが予定されています。

Q 南吉生誕100年 | 検索



新美南吉記念館

■所在地
〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1-10-1
TEL: 0569-26-4888
URL: <http://www.nankichi.gr.jp>

■開館時間
9:30～17:30

■休館日
毎週月曜日・毎月第2火曜日(祝日・振替休日)
のときは開館し、その翌日が休館となる)・年末年始

■観覧料
210円(中学生以下無料)
団体20名以上は各160円

100年記念イベント

新美南吉生誕100年を迎えるにあたって、同館が掲げたのは「初めての南吉、再び出逢う南吉」という言葉だといいます。子どもには、これを機に南吉の作品に巡り会ってほしい、大人にはもう一度接してみたいという願いが込められています。子どもの頃、だれもが一度は触れたこと

があるはずの南吉の世界ですが、時を経て、大人になってから再会すると、また違った印象や味わいを感じるはずです。南吉の大切にしたこと、語りかける言葉が、違う響きをもって届いてくるかもしれません。生誕100年をきっかけに、子どもと大人に、南吉作品を間に置いて、語り合ってもらえたらという思いのもと、魅力的な展覧会やイベントがさまざまに企画されています。



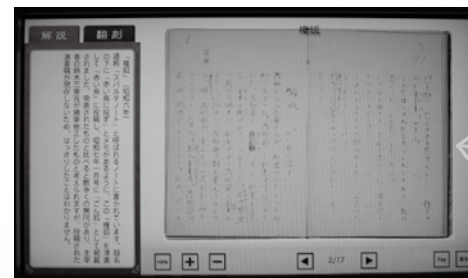
「手袋を買いに」の帽子屋

作中、子ぎつねが手袋を買い求めた帽子屋の正面部分が、原寸大で再現されている。隣に作りつけられた本屋の入り口は、図書室への入り口となっている。



「ごんぎつね」のはりきり網

展示室内には、兵十が魚を捕るときに使っていたはりきり網の実物が展示されている。写真やイラストでは分かりにくい、大きさや質感を確かめることができる。



「ごんぎつね」草稿

デジタル資料閲覧コーナーでは、南吉直筆の原稿や手紙などをスキャニングした画像を閲覧することができる。ノートに書かれた「ごんぎつね」の草稿が、全ページにわたって閲覧可能となった。

展示リニューアル

芝生で覆われた波打つような屋根をもつ新美南吉記念館。南吉が生まれ育った愛知県半田市岩滑の田園風景と調和するように、建物全体を地下に埋めるデザインとなっています。一九九四年六月の開館以来、多くの入館者が訪れる場所です。

同館では、先頃、二〇一三年の新美南吉生誕100年に先立って、大がかりな展示リニューアルを行いました。南吉やその作品の理解、また、授業のための教材研究に資する展示も、これまで以上の充実ぶりを見せています。その主な内容をご紹介します。

新美南吉記念館へ行こう



「新美南吉記念館」(愛知県半田市)では、新美南吉の生誕100年を記念して、さまざまなイベントが企画されています。この機会に足を運び、南吉が育った半田市の空気と風を感じてみてはいかがでしょうか。

